

J. D. Salinger の作品における東洋表象とカウンター・カルチャー

Jack Kerouac の *Lonesome Traveler* と比較して

尾田 知子

はじめに

J. D. Salinger (1919-2010) の作品においては、キリスト教などの西洋の思想・文化への言及の間隙を縫う形で、東洋思想・文化が使用されている。こうした洋の東西を問わない題材の選別は、批評家 Dennis L. O'Connor によって、Salinger の文学の独自性を示す重要な主題であると指摘されている (O'Connor 80, 89)。従来の Salinger 研究には東洋に関する個々の明示的な思想・文化の表象に重点を置く傾向があり、起源や性質を異にする思想・文化の共存に着眼した研究はほとんどなされていない。それにもかかわらず Salinger は、複数の宗教・文化の表象のなかで、西洋と東洋を並列することで、東洋の重要性を強調しているように思われる。*The Catcher in the Rye* (1951) を筆頭に、Salinger の文学には西洋中心主義に基づく価値観に対する反発が描かれ、社会批判的要素が顕著である。東洋思想を西洋的価値観と同列に並べることで、西洋／東洋という階層序列的二項対立を攪乱し、既存の社会的価値観の再考を促しており、主流社会・文化に抵抗するカウンター・カルチャーの要素を垣間見ることができる。しかし、Salinger の作品における思想・文化の複数性とカウンター・カルチャーの関連性は、これまで十分に分析されてきたとは言い難い。

本発表では、ビート・ジェネレーションの中心人物として名高いフランス系カナダ人作家 Jack Kerouac (1922-69) の短編集 *Lonesome Traveler* (1960) を再読し、Salinger の作品における宗教・文化の複数性とカウンター・カルチャー的表象との関連性を指摘した。東洋思想の使用とその理想化という観点から Salinger と Kerouac の作品を比較検討し、共通点を焙り出すことで、Salinger の東洋表象をカウンター・カルチャー的表象として位置づける端緒を開くことを、本発表の目的とした。

Salinger の文学におけるビート・ジェネレーションとの交差点

1959 年に発表された中編 “Seymour: An Introduction” (1959) において Salinger は、ビート・ジェネレーションとのスタンスの相違を表明している。“the Beat” (ビート族) に始まり、“the Dharma Bums” (禅の影響を受けたヒッピーのような人たち)、“the Sloppy” (だらしない者たち)、“the Petulant” (子どもっぽく短気な者たち)、“Zen-killers” (禅の破壊者) 等の否定的な語を使用し (*Raise High* 62)、ビート・ジェネレーションの作家およびその姿勢を批判している。しかし一方で、この記述は、Salinger の文学作品が、同様に東洋を作中に取り込むビート・ジェネレーションの作品と共鳴する可能性を示す。Frederick Gwynn and Joseph Blotner は、諷刺的なスタイルを使用して宗教的体験への崇拝を表現している点に、Salinger の作品とビート・ジェネレーションの作品の共通点を見出している (Gwynn and Blotner 2)。伝記作家 David Shields & Shane Salerno も、*The Catcher in the Rye* が Kerouac らビート・ジェネレーションにインスピレーションを与え、カウンター・カルチャーの創造に影響を与えたと述べる (Shields & Salerno 261, 263)。さらに、批評家 David Weir は、ビート・ジェネレーションの端的な特徴として、小説や詩の中における作家の alter ego の振る舞いを挙げる (Weir 241)。Duluoz という名前の分身を作中に登場させている Kerouac 同様、Salinger も Buddy Glass という作中人物を自らの alter ego としている。このように、Salinger と Kerouac の文学には、共鳴し合う部分が多く、比較研究の意義がある。

Lonesome Traveler と Salinger 後期作品の比較—東洋表象の観点から

Lonesome Traveler は、Kerouac 自身の旅をもとに書かれた 8 作品から成る短編集で、*On the Road* (1957) 発表の 3 年後に出版された。各作品の舞台となる土地で就いた職を通じて出会った人々との交流と、それを契機とした主人公の自己内省が中心に描かれる。Salinger の作品は、異文化表象、とりわけ東洋表象においても、*Lonesome Traveler* 収録作品と共鳴する部分が少なくない。本発表では、より明示的な共通点である「自然と東洋 (日本) の関連づけ」、「複数の宗教・文化の (一見ランダムな) 並列」の 2 点を中心に論じた。

短編集 6 作品目の “Alone on a Mountaintop” では、カナダ国境の山上の自然から日本や仏教が連想され、それが西洋的なものと並列されることで、東洋的なものの重要性が浮かび上がっている。例えば、語り手が赤いポピーの小さな蕾を日本の茶碗のデザインになぞらえた上で “delicate” と形容したり (*Lonesome Traveler* 109)、山上で風呂の準備のため薪を “the proverbial Old Woman of Japan” (おなじみの日本の老婆) のように拾ったと記したり (113) することで、日本への親近感を表現している。さらに語り手は、夕暮れ時に雪がピンク色に染まって

山々が美しい姿を見せるさまを、“Buddhaland splendor”（仏陀の国の壮麗さ）と表現し(113)、東洋にポジティブなイメージを付与している。また作品終末部では、山上で滞在した小屋を、仏塔であるパゴダになぞらえている(117)。これら4つの例では、カナダとの国境に位置するアメリカの自然から東洋的なものが見出され、重要なものとして理想化されている。同様の形で日本的なものと自然が結びつけられている Salinger の作品のうち代表は、自選短編集 *Nine Stories* (1953)収録の“De Daumier-Smith’s Blue Period”である。前者では、青い空の中を1羽の白い雁が飛んでいる構図の日本画を、アメリカ人の主人公が称賛する場面がある(*Nine Stories* 140)。精神性と超越性を象徴する青と純潔を表す白が使用されたこの水彩画は、批評家 James Lundquist によって禅の精神と結びつけられている(Lundquist 103)。アメリカ人の絵画作品を見下す一方、青い空と白い雁の日本画の美を称える主人公は、東洋とりわけ日本の自然を連想させるものへの愛着を示す Kerouac の短編の語り手と共鳴している。

東洋と他文化との並列も、*Lonesome Traveler* 収録作品の特徴である。“Alone on a Mountaintop”では、語り手が熊の糞と歯形を発見し、“the Primordial Bear”（原始の熊）、“King Bear”（熊の王）という語で太古の自然を例えています。同時に、その熊は“the Indians”（インディアン）、“the Redcoats”（独立戦争に参加したイギリス兵）を見たとき述べています。そして最後に想像上の熊を“Avalokitesvara the Bear”（熊の菩薩）と呼び(*Lonesome Traveler* 115)、複数の文化表象のなかで東洋的なものを際立たせている。同様に、ヒンドゥー教や仏教などで「涅槃」や「解脱」を表すニルヴァーナの概念の説明に天使を持ち出す(116)など、東洋の宗教的なものとキリスト教的なものの並列も頻繁に見られる。短編集8作品目の“The Vanishing American Hobo”においては、浮浪者を指すホーボーに古今東西のイメージが重ねられている。例えば、玉蜀黍の穂軸パイプで刻み煙草を吸う老いたホーボーから、庵で茶を飲みつつ悟りを待つ孤独な日本の老人像が浮かび上がっている(149)。別の箇所では、キリスト、仏陀、Rain-In-The-Face 曾長(1835-1905)はすべてホーボーであったと述べ(151)、キリスト教、仏教、ネイティブ・アメリカンを並列している。同様に、アメリカの著名なコメディアン W. C. Fields (1880-1946)の赤鼻が、仏教における大乘・小乗・金剛の三界の意味を説明したとも記し(151)、西洋と東洋を結びつけている。こうした複数の宗教・文化の並列と東洋の理想化は、Salinger の作品における東洋表象と共通する。先述の“Seymour: An Introduction”では、新約聖書、旧約聖書と、ヴェーダンタや道教などの東洋思想が、彼の東洋的ルーツの源として同列化されている(*Raise High* 131)。さらに、Salinger 作品の最重要登場人物である Seymour Glass は、“Semitic-Celtic Oriental”（ユダヤ=アイルランド系東洋人）と形容されている(78)。ユダヤ系とアイルランド系の血統を持つ Seymour は、WASP (White Anglo-Saxon Protestant)を中心とするアメリカ社会において共に周縁的な位置に追いやられている「東洋人」と結び付けられており、Kerouac の作品でのホーボー同様、入り交じる複数の文化を体現する。

おわりに

本発表では、複数の宗教・文化の並列による東洋の理想化という観点から、Salinger と Kerouac の作品比較を行い、両者の共通点を指摘した。Salinger は、WASP に対して同様に「周縁」に追いやられてきた東洋に、西洋に匹敵する価値を見出し、付与することで、アメリカの文化・社会構造に長く根付いてきた WASP 中心主義への対抗を意図していると考えられる。その手法には、*Lonesome Traveler* における Kerouac の東洋の使用と通じる、カウンター・カルチャー的な点を見出すことができる。

引用文献

Kerouac, Jack. *Lonesome Traveler*. 1960. Penguin, 2000.

Lundquist, James. *J. D. Salinger*. Frederick Ungar, 1979.

O'Connor, Dennis L. “J. D. Salinger’s Religious Pluralism: The Example of *Raise High the Roof Beam, Carpenters*.” *The Southern Review*, vol. 20, no. 2, 1984, pp. 316-332. *J. D. Salinger’s Short Stories*. edited by Harold Bloom. Infobase, 2011, pp. 79-94.

Gwynn, Frederick L., and Joseph L. Blotner. *The Fiction of J. D. Salinger*. U of Pittsburgh P, 1958.

Salinger, J. D. *Nine Stories*. 1953. Little, Brown & Co., 1991.

---. *Raise High the Roof Beam, Carpenters, and Seymour: An Introduction*. 1963. Penguin, 1994.

Shields, David and Shane Salerno. *Salinger*. Simon & Schuster, 2013.

Weir, David. *American Orient: Imagining the East from the Colonial Era through the Twentieth Century*. U of Massachusetts P, 2011.

* 本研究は JSPS 科研費 JP19J10995 の助成を受けたものである。